

女子教育に関する一つの考察（第二報）

— 平安朝における婚姻方式と貴族の女子教育 —

岡 ヤス子^{*}

The Study on the Education of Girls (II Report)

— The Mode of Marriage and the Education of
Girls in Heian Dynasty —

Yasuko OKA

はじめに

10世紀から11世紀における平安盛期の文学上の貴族女性の輝かしい功績はなるべくしてなったといえよう。すなわち、文化は人々の天賦の能力のみによってなるものではなく、学習によってなし得るものである。平安貴族社会における芸術至上の耽美主義、「もののあわれ」を基調とし、いわゆる情念偏重の時代的思想、当時の女性観など相まって、女子に対する教育を愛情深く実施した結果、当代女性の芸術的感覚が育くまれたと考える。

なお、第一報においては、平安貴族の女子教育の理想および、内容を報告したが、今回は平安朝における婚姻方式を中心に、それとの関連において貴族の女子教育を考察したい。

1. 古代人男女の愛情は、古事記の恋愛譚や万葉集の相聞歌などにみる如く、男女が互に直接求め合い、互に歌の唱和によって恋をちぎり、恋愛に生命を燃焼し、そこに人間の生きがいを見出したのであって、この点で男女の立場は対等であったといえる。万葉集巻一に、雄略天皇の「此岡に 菜採ます兒 家きかな 名のらさね 云々」とあるが、一国の元首が岡辺に菜をつむ少女に対してうたいかけ、女がこれに答えれば結婚も成立したのであって「はやびと

の名に負う夜音いちじるく 吾名はのりつ 妻とたのませ」とあることから推察できる。万葉期の婚姻方式は妻問婚といわれるが、山辺赤人の歌に「古へに ありけむ人の しづはたの 帯ときかへて ふせ屋たて 妻どひしけむ かつしかの 云々」とあり、また、作者未詳の歌「みそらゆく 雲にもがもな 今日ゆきて 妹にこととひ 明日帰りこむ」などの歌にみる如く婚姻に関して「妻問い」のことは用いているが、この期においては夫婦別居の場合が多かったと考えられる。しかも、額田女王、盤姫、阿部女郎、大伴坂上郎女の歌など、恋に生き、恋に死ぬことを恐れぬわが古代女性の心意気を強く表現した歌が多くみられる。坂上郎女の歌に「来むといふもこぬ時あるをこじといふを こむとは待たじ こじといふものを」（万葉集巻四）。また、「わが背子は待てど来まき 天の原 ふりさけ見れば ぬばたまの 夜もふけにけり さ夜ふけて 嵐の吹けば 立待つに わが衣手に ふる雪は 氷わたりぬ 云々」（同巻十三、作者未詳）など、情熱と切実な感情をもって、問い来る夫を待つ女性の心情を強くうたいあげている。中国の制度に倣った養老令の、原則として「嫁入婚」「家長専制」の精神をもととした婚姻に関する規定など、

* 家庭科教育法研究室

現実には無きにひとしい状態であったといえる。

奈良朝より平安朝に移っては、男性側よりの求婚がめだち、これに対して女性側には、その母が強い存在となり、黙認あるいは事後的に承認を与えて、男性を通わせる権利をもつ事態がみられた。さらに、平安初期から中期にかけては、求婚に対して女の背後には母のみならず次第に父親も幫助者として加わるようになり、さらには、父親が婿に迎えたい男性に求婚し、成立すれば共に住む婿取婚も盛んに行なわれるようになった。栄花物語「さまざまのよろこび」の条に、藤原道長について「かうやん事なき御心ざまを、自ら世に漏り聞えて、我も我もとけしきだちきこゆる所々あれど」と、多くの人が婿にと望んだことを述べている。

かように奈良朝と同じく妻問う俗は、当代でも依然継続して行なわれたが、平安朝における「宇津保物語」「源氏物語」「枕草子」「栄花物語」「鏡もの」などの諸文献をみるに、夫が妻を問う方式について妻問いの語は殆どみられず、「通い」と表現しており、その上、平安時代の貴族は驕奢の生活から淫蕩にふけり、男女の風規が乱れて一夫多妻の通い婚が多くなったと考えられる。この通い婚を実証する記録は多い。栄花物語「月の宴」に「九条の師輔のおとど（右大臣）いとたはしくおはして、あまたの北の方の御はらに、おとこ十一人、をむな六人ぞおはしける」と。師輔は多くの北の方のもとに通ったが、子供はその母方で育てられている。師輔の子兼家は、摂津守藤原中正女時姫を正妻とし、その他、陸奥守藤原倫寧女、太宰大貳藤原国章女、源兼忠女などに通い、しかも「独り居」とみられる立場から村上皇女保子内親王をも妻としたが、生涯いづれの方へも通い婚で終っている。倫寧女を妻に求めるとき、兼家は倫寧に強く求婚し、その代償として陸奥の国司に

任じられたことは「蜻蛉日記」に記載されている。兼家の子供は、中正女に道隆・道兼・道長・超子・詮子、倫寧女に道綱、国章女には緩子、兼忠女も女子を出生したが、子供はすべて母方で生まれ、母家で育ち、父とは同居していない。栄花物語「花山たづぬる中納言」に、藤原伊尹の次男義孝について「桃ぞのゝ中納言保光と聞ゆるは、故中務卿宮代明親王の御子におはす、その御女君に年頃通ひきこえ給ふに、うつくしきをのこを（ぞ）生まれ給へりける」と。源氏物語「桐壺」には「光源氏は12才で元服し、その夜かねてより源氏を婿にと願っていた加冠の大臣の御殿に退出し、大臣の女葵の上と婚礼の式を行ない、婿となったが、光源氏は年上の葵の上と共に住むことはなかった」としている。兼家の男についてみるに、長男道隆は高階成忠女に婿とられて二条に住まい、次男右大臣道兼は粟田家に婿とられて粟田殿と呼び、五男道長も源左大臣雅信女倫子の婿となって（道長の希望をまず雅信の妻が許して通させた）雅信の土御門第に住んだのである。（栄花物語・大鏡）道長の長男頼通は18才で具平親王の御女隆姫15才に婿とられて通った。（大鏡）

以上の例にみるごとく、平安朝中期にはなお婚姻形式としては妻問いと通いとみられる通い婚の俗が一部にみられる一方、婿取婚として妻方に同居する方式も少なくなかったのである。しかし、何れの場合も子供の養育保障は母方にあり、その上婿の衣服一切の世話までも妻方で行なわれたようである。すなわち、衣服は「同一族の表徴」として、妻の母の重要な任務と考えられた。道長の妻倫子の母は86才で死去するまで夏と冬の「衣更」には婿の新衣を整え贈ったという。（栄花物語）（このことから子供の裁縫技術学習の必要性が当然に考えられる）子供の養育保障は、皇子女の場合も同じで、

兼家は長女超子を冷泉院女御として入内させ、後宮に華麗なる直廬をしつらえて、自邸を後宮に移した形にして住ませた故に、帝は使いをおくって女御を召され、また通われたのである。(これは武家社会における嫁入婚の原型ともいえる)しかし超子は他の女御と同じく懐妊すると、東三条の里第に下り、里第で三条天皇以下つぎつぎと皇子を出産し、そこで養育している。さらに「この冬若宮の御袴著は東三条院にてあるべうおほし掟てさせ給を、云々」とあるが、3才になられた若宮の袴著の御祝は「せめて」との主上の強い御希望で内裏で行なわれた。しかし4日目の暁には女御は若宮と共に里第へ退出せられた。次女詮子も母(中正女)の家から円融院女御として入内し、一条天皇を東三条第で生み、育て、超子逝去のちは、この第をおくられ、院号を東三条院と称した。(栄花物語) 道長の長女彰子は一条天皇の中宮となり、土御門第で後一条天皇、後朱雀天皇を生み育て、この第を相続している。(栄花物語・大鏡) 光源氏と葵の上の間の長男夕霧は、母左大臣家で育てられ、父子同居することはなかったという。

かように、通い婚による一夫多妻の婚姻関係は、枕草子に「婿が、つねに夜離れする」ことをくり返し述べている如く無宣言離婚となり、また、重婚となる例も多く誠に不安定で、子供の養育は自然と母方で行なわれることになり、10世紀、11世紀初期までは父方扶養の義務は成立していなかったと考えられるのである。そのため、女子の財産権確保とともに、子女育成のための教養が重要な問題となるはずである。先の例でも、支配階層諸氏をはじめ多くの貴族は邸第および氏族財産を、氏族代表の女性が伝領して氏外への逸脱を防いだことは、「栄花物語」「大鏡」「今鏡」などに明かである。

(当時の財産制は夫婦別産制であった) 宇津保物語の正頼一家は、両親と女たち数世帯との大家族が同居しているが、平安朝の婿取婚の俗では多くの場合、父母はたのみとする女夫婦と同居して外孫を育てることに協力し、やがて女夫婦がまたその女に婿をとる時期がくれば、両親は邸を譲って、他に移り住むことを通常とした。平安末期に到るまで、剛を排除し、無気力にして柔弱、女性的優美さを求めた貴族の思想と、婚姻方式による母系家族の女性の地位の存続した社会情勢を背景として、女性に対する組織的教育機関はとどざされていても、女性の存在を軽視せず家庭において教育が強調されたと考える。1934年8月、中国の魯迅は「中国の文字は大衆に対して身分、経済という制限のほか、むずかしいという一つの高いしきいを設けている云々」と当時の新聞紙上に発表しているが、奈良朝末期から平安朝初期にかけて、その困難な漢字をもとに万葉仮名を、さらに簡略化された簡易軽便な仮名文字が徐々に形づくられ、実用化された結果、国語を写すことが容易となり、自由に日本人の思想を表現することが可能となったことは女子教育の促進拡充に大いに役立ち平安朝文学上の偉業をなす一因となったのである。紫式部も「よろづの事、昔には劣りざまに浅くなり行く世の末なれど、かんなのみなむ今の世はいと際なくなりたる。」(源氏物語「梅枝」)と述べている。

平安末期には鎌倉・南北朝時代以後次第に確立した嫁入嫁の前提とも考えられる経営所婿取婚方式(高群逸枝氏による)がみられるようになり、女側の婚主が自家以外の別の所を借りて婿取りの婚礼を行なった。その場を経営所と称し、暫く経営所に住み(3ヶ月〜6ヶ月程度)、そのうち新婦の父が新居を用意して若夫婦を移り住ませる方式であった。平安末期、武家社会

に移ってからは、新婦が行列美々しく夫の母方に迎えられる（嫁入婚の前身）方式もみられるようになったが、これに対して「明月記」の筆者定家は「心神不快にして之を見ず」と述べていることから、平安期は古代よりの母系家族的婚姻形態が中心であり、「三界に家なし」といわれるようになった嫁入婚は未だ確立せず、女性の存在はこの立場からも社会的にも軽視されることなく従って教育に意が用いられたと考えるのである。

2. 日本書紀に「大夫は民を治めしむる所なり。能く其治を尽すときは、すなわち民之に頼る。故に其禄を重くするは民の為にする所以なり」と。これらの結果広大な荘園をもち勢力を得た平安貴族は、果して民の為に善政を行なったであらうか、いな、自らの権力の維持拡大のためには天皇の権力をも抑圧し、互に相争って政治的権力の掌握にのみ努力した。かって蘇我氏が行なった如く天皇の外戚の地位をのぞみ、高級貴族はひたすら女の誕生をのぞんだのである。枕草子「あじきなきもの」に「しぶしぶに思ひたる人を忍びて賀によりて思ふさまならずとなげく人 云々」と、婚姻は互の理解と愛情の上になりたつべきであると述べているが、貴族の政治的欲求を満たすためには女の意志にかかわらず入内させたのである。例えば師輔の次男関白兼通と三男右大将大納言兼家は、互に関白となるため、おのおの女を円融帝の中宮にせんものと激しく相争い、互に反目し、兼通は始終弟の失脚を心がけていたのである。（栄花物語）道兼について「北の方の御腹に、男君たちあまたおはするに、女君のおはせぬを口惜しき事におぼすべし」と。（栄花物語）また、「大ひめきみは、一条帝十一にて御元服せしめたまひしに、十五にてやまいらせたまひけむ。やがてその年六月一日後にみさせたまふ。中宮と申き」と大鏡「第四卷」にある如く関白道隆は長女定子を

15才で入内させ、11才の一条帝の中宮とした。枕草子「百四段」には「淑景舎、春宮にまゐり給ふほどのことなど、いかがめでたからぬことなし 云々」と、ある如く道隆は次女原子をも定子につづいて春宮の妃とした。しかし、中宮定子も春宮妃も帝や春宮よりの度々のお召しに応じようとしないうことが多く、父道隆は「早く、早く」とお召しに応じるようにすすめている。（大鏡）入内が女の積極的意志と愛情を根底にしたものでなく、勢力確保の具にしたであらうことがこのことから考えられるのである。

入内させる為には、幼時より教育をはじめ、裳着を迎えては成人教育として美と学芸を修めることに一段と努めたのである。これには母や乳母の果たした大きな役割を見のがすことはできない。事あるごとに行事を計画し、その都度詩歌管絃の宴を催して学芸の能力を競い、内裏歌合、中宮歌合、後宮歌合、大臣家歌合など有名な歌合わせの会がしばしば催されて和歌の才を競い合った当時、入内したあまたの中宮・女御相互間の争いははげしく、例えば村上天皇の女御安子（師輔女）と同じ帝の女御芳子（師尹女）はいとこ同志でありながら大鏡によれば、美しく才学優れた女御芳子に対し、女御安子は「すこし御心がなく」とはいえ「御ものうらみなどせさせ給ふやうにぞ、よその人はいはれおはしまし。」とあるように対立的状態であった。そのため各自の優位を保つためには、才学ある女性をあまた選んで侍女（家庭教師）として付添わせた。このことは結果として国司、郡司などの女の知育・芸能をも促進することとなったが、当時はこれら宮仕えの他に地位の高い貴人の妻女も近侍に才学ある女性を雇い入れる風習があった。それら貴族の援助により才女たちはさらに各自の文才・歌才を発展させる機会を与えられ、多くの女流文学者の名を平安文学史上にと

どめることとなったのである。このことは、道隆、道長以後は才媛を宮仕えさせることが少なくなり、更級日記（1060年頃成る）以後女性の手になる優れた文学作品をみることの少なくなったことから考え得られるのである。

大鏡に「さて、関白殿などうせさせ給てのちに、をとこみこ一人（敦康親王）女みこ二人（脩子、嬖子）生みたてまつらせたまへりき。云々」とある如く、定子は3人の皇子女を出生したが、父関白の死後であり、定子の後見となるべき兄伊周、隆家ともに失脚して、政権は道長に移り、一条帝の第一皇子であられる敦康親王は「有力なる後見」なきまま立太子の御希望もかなわず、「よの中をおぼしなげきてうせたまひにき、御とし廿にて、あさましうてやませ給にしかは」と。（大鏡）皇后定子も同じ一条帝の中宮彰子が父道長を「絶大なる後見」とする権勢の前には抗すべくもなく、内裏を離れ、「御とし廿二三ばかりにて、うせさせ給にき、（中略）すえのよは、一条わたりにいとあやしくおはすとぞきこへ給し」と。（大鏡）また、大鏡に、円融帝も女御蓮子の父関白の権力、後見の前には、自己の意志を抑圧されねばならなかったことを述べている。

婿取婚の盛んになった平安中期には、息子は殆ど他に婿取られて実の親と同居しない故、一門の発展は女にかかり、「有力な後見者」となり得る婿を求めることが重要なこととなった。後見の重要性については、当代の物語・随筆・鏡ものなどに数多く述べられている。三十余年政治上の権力を握った道長の後見のもとで、彰子ら5人の女たちは、それぞれ入内して栄華を全うし、この時期を藤原氏全盛時代といわれる。（栄華物語）源氏物語「桐壺」の巻にも光源氏の父帝は、源氏を「春宮にと思召されても、御後見申しあげるべき人もなく」臣下に列して、源氏姓を名

のらせ給うたことを述べている。

政治よりも優雅な生活にふけり、「詩歌にたくみに、糸竹に妙なる」（徒然草）ことを理想とした平安貴族であれば、「有力な婿取り」をするためには、女性により美しく、より魅力あるための豊かな学問・芸能を身につけさせる必要があったことは当然と考えられる。特に和歌は社交上に必要なたしなみと認められた。男から歌を贈られた女性は返歌することを俗とした。心に思うことを和歌によって云いあらわすことは女子の最も大切な教養になっていた。手紙の文中や日常の会話の中にも歌の一句を挿入することが流行していた当時、「古今集」などの歌集を読んで暗記することが必要であった。作った歌は書いて贈らねばならず、歌道と並行して書道も重んぜられた理由がここにある。「中納言（道隆）はあちこちの情を通じられた女の中で、貌、才学など人よりことに優れた方を嫡妻とした」と述べている。（栄花物語）この点からも平安貴族女性の教育が盛んに行なわれた理由を考察し得ると考える。偉大な文化は、人の生来の能力によってのみなるものではない。

3. 貴族の子女は何時の世でも早熟早婚である。しかし平安朝における帝の早婚は藤原氏が幼帝を擁立し、政権を執らんがための手段でもあったといえよう。幼帝が御位に即くとすれば、いわゆる「後の政」をなさる皇后は年長者であることが好都合といえるであらう。すなわち皇后は幼帝を多少とも教導申しあげるべき地位にもあったと考えられる。桜井 秀氏は「中古人の早婚は一面にその早熟を証するものであるけれども、他面にはたゞ慣例に従って結婚するまでであって夫婦関係といっても、実は変態な兄弟関係にすぎぬようなことも少なくなかったと推せられる」（総合日本史大系巻四平安朝下）と述べておられるが、何れにしても入内さ

せようとする女には幼時から十分な教育を行なう必要があったであらうことがこの点からも推察できると思うのである。一方才学ある官仕えの女房も主上の教養を補佐する道を講じたであらうことも考えられる。

ちなみに、天皇と皇后(または中官)との年齢の一部を挙げると次の通りである。(中山太郎著、日本婚姻史による)

天皇	立后宝齡	皇后(中官)御名	入内年齢
文徳	16	明子	18
清和	16	高子	25
醍醐	17	穩子	18
村上	18	安子	19
円融	15	嬪子	28
一条	11	定子	15
後一条	11	威子	20
堀河	15	篤子	34

しかし、教育は学芸の研讀、練磨とともに、理想とする人間像の実現をめざして、教育的努力がつけられねばならない。紫式部は、文弱浮華の世相の世にあって、強い意志をもち、若き未亡人として聡明で理性的な母性愛により、一子大弐三位を立派に育てあげた女性である。「あらざらん この世のほかの思い出に いまひとたびの あふこともがな」と詠じた和泉式部の如き情熱的才媛も存在したとはいえ、平安貴族社会における多くの女性は「源氏物語」の中の「夕顔」や「浮舟」にみる如く、深窓に育てられて、太陽の輝きに接することも稀で機能性を全く失った被服を身にまとい自由を殆ど拘束された環境の中での教育では人間的強さや自主性を欠き、依存的であり、遁れ難い宿世観を根底とする消極的な考え方が支配的となったであろうと思われる。従って女性は専らその姿貌の美さに意を用い、学芸を「かた」の如く修めて男性に認められ、それによって現世の

幸せを得ることを願ったのではなからうか。そのため一度逆境にたてば運命に反発することを知らず、前世の宿報をおそれ、浮世のはかなさに堪えきれずして出家し、または家を出て行方知らずになった者も数少なくなかった。ここに平安貴族社会の特異性を背景とした教育を今更のように感ぜざるを得ないのである。

まとめ

平安朝における女子教育の実施には種々の要因が考えられるが、以上当期の婚姻の実態との関連も見逃すことはできないと信じるのである。

教育は生活と共にある。平安末期、貴族政治から武家政治に急転し、剛健にして質素簡約を旨とした武家社会の確立とともに、女子の教育も堅実な婦徳の育成に向けられ、理想の人間像の推移により教育のあり方は、前代の教育の影響を受けつつも実質的变化をもたらすこととなったと考えられる。今後は武家社会における女子教育について研究をすすめたいと考えている。

参考文献

日本婚姻史	高群逸枝著
日本婚姻史	中山太郎著
日本女性史	井上 清著
日本風俗史	和歌森太郎著
風俗史の研究	桜井 秀著
日本女性史(1・上代)	和歌森太郎)共著
	山本 藤枝
日本教育通史	尾形裕康著
日本教育史	唐沢富太郎著
蜻蛉日記・和泉式部日記	日本古典文学大系
枕草子・紫式部日記	全 上
栄花物語	全 上
宇津保物語	全 上
源氏物語	全 上
大 鏡	全 上

Summary

The Study on the Education of Girls — The second Report

— The Mode of Marriage and the Education of Girls in Heian Dynasty —

In my first report I described the ideal and system of the education of aristocratic girls appeared in the literature of Heian period. Now I want to examine the girl's education of the same period emphasizing the mode of marriage and other matters connected with it.

1. In Nara period a husband used to visit his wife living in a different house. In the middle of Heian period this custom still existed, but the case of taking a husband into the family of this wife was more and more introduced. Toward the end of Heian period the aristocratic government of Fujiwara clan was suddenly replaced by the militarist one. Since this period the custom of marriage, taking the wife into her husband's family, began to be in vogue. The Heian mode of marriage appears in many stories in classic literature in this period.

The husband—visiting form of marriage tended to be polygamous, the married life was unstable and only the wife's family was responsible for the raising of children. The wife had to succeed the properties of the family. As the marriage was started by the exchange of short poems between a man and a lady, it was natural that girls were educated, since their childhood to have many accomplishments.

2. In the middle of Heian period most husbands were taken into the wives' families. The sons of a family usually moved into other families. Therefore the development of a family depended on how good a son-in-law was taken into it. Thus even Fujiwara clan could not thrive without a powerful guardian. Even the emperor could not get along well without influential, high ranked government officials among maternal relatives. In order to have excellent sons-in-law, daughters were carefully educated to be beautiful and charming and to have better learning and accomplishments.

3. Thus to become the maternal relation of the emperor, the high-class aristocrat eagerly tried to send his daughter to the court to be the consort of the emperor. More and more emphasis was placed on the daughter's education, so that she might be a pretty, intelligent lady to be chosen as the empress. Encouraged by this tendency daughters of local governors were also trained to have literary talent. On the other hand, the contrivance of Kana—letters out of Kanji characters made it easy for girls to be educated. Consequently there are a lot of famous woman writers in the literary history of Heian period.